

C F T ニュース & 息抜き (10 月)

全日本コーヒー公正取引協議会（コーヒー公取協）に寄せられた問い合わせなどを、トピック形式で毎月リリースします。参考になれば幸いです。

1. 2023年9月の気になる問合せ

- (1) ハワイからコナコーヒーを輸入しコナブレンドコーヒー販売を考えている。コナコーヒーは高いのでブレンド率10%を考えたが、仲間からブレンド呼称は当該豆が30%以上使用しないとブレンド名称は許されないと聞いた。ハワイでは10%ブレンドでよいので、おかしいと思い消費者庁に問い合わせたところ、全日本コーヒー公正取引協議会に確認するよう言われた。米国で10%ブレンドが許されるのに日本が30%とするのはおかしい。しかも民間団体が決めるのもおかしい。何とかならないか。

⇒ コーヒー公正競争規約は〇〇ブレンドとする場合、〇〇に相当する国のコーヒー生豆を30%以上使用することを求めています。

全日本コーヒー公正取引協議会は1991（H3）年に設立されました。それ以前は、例えば、ブルマンブレンドと称する製品にはブルーマウンテンコーヒーを2%程度ミックスするもの、極端な場合は1粒入れてブレンドと称するものもあり、消費者を混乱させるとして、東京都や主婦連などから（社）全日本コーヒー協会に対しコーヒー公正競争規約を定め、ブレンド率をルール化するよう強い要請があり、規約を定め協議会が設立されました。

「民間団体が決めるのはおかしい」と言われますが、ブレンド率はコーヒーメーカーの代表や行政庁などが集まり、味わいや事業者及び消費者の許容度などを調整して定められたと思慮します。規約設定手続きは、団体が規約案をまとめ公正取引委員会に提出、公正取引委員会委員長の認定を受け、官報告示されました。勝手に決めたものではありません。

ブレンド率は米国やEU諸国は10%で許容されますが、味覚の鋭い

日本人には30%以上が適切ということだったのでしょう。

コーヒー公正競争規約はコーヒー公取協会に課せられる上乗せ表示で、非会員の貴社が10%ブレンドで販売されても食品表示法違反とはなりません。

- (2) 当社グループにコーヒー焙煎機を所有する部門があり、この度、当該焙煎機を使って「自家焙煎コーヒー」名称でレギュラーコーヒーを販売してはどうかとなった。消費者庁表示対策課にネーミングについて聞いたところ「自家焙煎コーヒー」の定義はないと思うが、全日本コーヒー公正取引協議会に確認して欲しいと言われたので、電話した。気にしているのは「自家焙煎コーヒー」名称で販売した場合、景品表示法の優良誤認表示とならないかということである。コーヒーの焙煎は事業所で行い「自家焙煎コーヒー」を製品名称として販売する考えである。

⇒ コーヒー公正取引協議会は自家焙煎珈琲店や自家焙煎コーヒーについては規約上何も定めていません。

通常、自家焙煎といえばお店に焙煎機を設置し、これでコーヒー生豆を焙煎し顧客にカップ又は包装容器に入れてその場で製品を提供していると思慮します。

「自家焙煎コーヒー」といえば、自家焙煎珈琲店で提供するコーヒーと消費者は考えるのでないでしょうか。

使用されていない自社の焙煎機を活用して、コーヒー焙煎を行い「自家焙煎コーヒー」名称で販売したい、とのことですが、先に述べたようなことを考えると、消費者は違和感を持つのでないでしょうか。率直に言って、スーパー等で販売される袋物レギュラーコーヒーと何ら変わらず、ネーミングが誤解を与えかねません。

景品表示法の優良誤認は違反行為を具体的に明文化せず、一般消費者が異議申し立てすると、行政庁が「優良誤認」や「有利誤認」に該当するか否かを調べ、該当すると措置命令が下ります。率直に申し上げて消費者誤認を招くような製品名称は避けるべきと考えます。

なお、日本標準産業分類上は、「自家焙煎コーヒー店」はコーヒー製造業に分類されるとみています。

2. SCAJ2023 開催

9月27日～30日まで（一社）日本スペシャルティコーヒー協会（SCAJ：会長 秋本修治）主催のスペシャルティコーヒーイベントが開催されました。69千余名の来場者があったとのこと。CFT子は初日（192百名来場）に訪問しましたが、例年通り20代、30代を中心に驚くほどの来場者でした。これだけ多くの若者が全国からコーヒーイベントに集まるということは、コーヒーは未来を託せる商品であると彼らが考えている証だと思われました。

エチオピア、ブラジル、コロンビア、ヴェトナムなど主要なコーヒー生産国が出展するほか、日本のスペシャルティコーヒー取扱い企業のブースもあり、様々なコーヒーを楽しみました。ストレートコーヒーを何杯も試飲しましたが、どれも美味しく産地ごとのコーヒーの味の深さを知らされました。CFT子は29歳まで家庭ではインスタントコーヒー中心でしたが、30歳で某レギュラーコーヒーに出会い、その美味しさに捉えられ、以後、レギュラーコーヒーに転換しました。30歳で購入した手動のコーヒーミルは今も現役です。

CFT子の全日本コーヒー協会時代、国際コーヒー機関がコーヒー生産国のコーヒー生産に従事する女性に焦点を合わせインターナショナル・ウィメンズ・コーヒー・アライアンスの設立について説明していましたが、（一社）インターナショナル・ウィメンズ・コーヒー・アライアンス日本支部が出展しているのに驚きました。国際的に「ビジネスと人権」が言われる時代、コーヒーの手当てに当たって生産国の状況を把握することは、避けられない課題になってきていると思われます。消費者団体との話合いでも、コーヒーの輸入に当たってコーヒー生産者の状況を把握して輸入しているかと問われることがあります。

いずれにしても、SCAJのイベントに多くの若者が参加し、そこへ出展するブースには美味しいコーヒー、コーヒー生産国、コーヒー生産国の女性労働者の課題に取り組む団体などなどがあるほか、コーヒーの2050年問題に取り組む機関のブースもあり、今日的な課題を知り、向き合うには貴重な場で、日本のコーヒー産業の未来につながるイベントと感じた。